

2013 年

アジアユースコンボケーション at Philippines



2013 年 7 月 31 日～8 月 4 日

編集：藤永

目次

1 参加者一覧

2 プログラムスケジュール

3 各プログラム報告

- 独立記念館
- Chosen Children Village
- Opening Ceremony
- Cultural Night
- Morning Devotion
- Session1
- Session2
- Session3
- AYR 選挙 & AYC レポート
- Circle of Light
- Closing Ceremony
- Taal Volcano
- President Ball Party
- AAC Closing Ceremony



4 参加者の感想



参加者一覧

	氏名		所属	推薦 Y' s Men' s Club
1	藤永	Fujinaga	東日本 中央大学 YMCA ひつじぐも	八王子ワイズメンズクラブ
2	岡本	Okamoto	東日本 中央大学 YMCA ひつじぐも	八王子ワイズメンズクラブ
3	平野	Hirano	東日本 清泉女子大学 YMCA	東京北ワイズメンズクラブ
4	廣瀬	Hirose	東日本 宇都宮大学	宇都宮ワイズメンズクラブ
5	日下部	Kusakabe	東日本 東京 YMCA liby	東京たんぽぽ Y サービスクラブ
6	石井	Ishii	東日本 横浜 YMCA 横浜 Y3	なし

プログラムスケジュール

	Day 1 7/31	Day 2 8/1	Day 3 8/2	Day 4 8/3	Day 5 8/4
		起床	起床	起床	起床
午前		朝食	朝食	朝食	朝食
		観光	Morning Devotion	Closing Ceremony	AAC Convention Closing Ceremony
		Chosen Children's Village 訪問	Session1	チェックアウト 出発	
		ホテル2 タガタイ	Session2		
午後	到着	昼食	昼食	タール火山 観光	昼食
	自由時間	Opening Ceremony	Session3	昼食	解散
		AYR 選挙について	AYR 選挙	ホテル1 マニラ	自由行動
		カルチュアル・ナイトの準備	AYR レポート作成	休憩 衣装変え	特大ショッピングモールにて自由行動
	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食
夜	参加者登録確認	準備	Circle of light	President Ball Party	ホテル1 マニラ
	ホテル1 マニラ	カルチュアル・ナイト	自由時間 プール解放	ホテル1 マニラ	自由時間
	自由時間	自由時間	就寝	自由時間	就寝
	就寝	就寝		就寝	
					翌日 日本へ帰国

初代大統領の独立記念館

文筆：岡本

8月1日、僕はフィリピンの独立記念館に行った。そこは初代大統領の家もありまた、独立を宣言した場所でもある。初代大統領の名前は **Emilio Aquinaldo**(エミリオ・アギナルド)で、この人にまつわる歴史やフィリピンの歴史が刻まれている。1階は独立記念館になっていてこの独立記念館では当時の大砲や洗濯場など興味深いものも展示されていた。また、室内の展示場にはボウリングをしていたとされる証拠が現在も残されていてそ



の時代に遊ばれていたらしい。また、国歌やそれにまつわる話も説明されていた。

2階にあがると、エミリオの家のように、左に進むと寝室やバルコニーに進むことができる。会議室のようなものがあり、壁に絵がかかづられていて天井には模型で作られているフィリピンやその

周辺の地図を見ることが出来、博物館などと違う趣が施されている。また、手紙を入れておく秘密の引き出しがあり、命の危機が迫った時の秘密の脱出口、通路などもあると言っていた。



Chosen Children Village

文筆：岡本

初代大統領の家の次に Chosen Children Village という身寄りのない子供を引き取り、育てる施設を訪問した。今回自分たちはトイレトペーパーなど生活用品を寄付し、お礼として子供たちはダンスや歌と、様々な多くのパフォーマンスを提供してくれた。とても楽しめたし、できれば入って行ってみんなで踊りたいときえ思った。パフォーマンス後に記念撮影をした後、施設の中も少し見学させていただくことができた。子供たちが就寝する場所で惜しまれつつも子供たち別れ、施設の案内をしていただくことになった。

施設の人の説明によるとここは8歳以上の子供しか受け入れていない事が分かった。おそらく8歳になるまでに病気で亡くなってしまいう子がいるからであろう。さらに施設には子供たちが使用する遊び場があり、バスケットボールやバレーボールなどをして遊ぶことも出来る。自分たちも数分間遊んだが自分たちがいつも遊ぶような場所と相違なく楽しむことが出来た。

しかし問題もあると施設の人は言う。引き取り手がいないまま大人になってしまうとほとんど引き取ってくれる人がいないのだそうだ。だからこの施設で一生過ごすことになる子もいるのだと言う。引き取り先がほしいのは幼い子供らしい。

だがこの施設では子供への自立支援を実施していた。一般人となんら変わりなく社会で自立してもらうことを目指しているのだそうだ。実際、個人名は伏せるがその施設で働いている女の子に会うこともできた。



Opening Ceremony

文筆：石井

AYCの会場であるTICCに到着するとオープニングセレモニーを行いました。オープニングセレモニーはフィリピンのユース達が担当し、日本、フィリピン、バルバドスの国歌斉唱、開会に際しての祈祷、讚美歌斉唱などを行った後、事務局の方より事務局スタッフの紹介、AYCのプログラム説明、ハウスルール説明がありました。

国歌斉唱ではフィリピンとバルバドスのユースは誇らしげな顔で歌っているのに対し、日本のユースは人数が多いにも関わらずあまり歌わずうつむきがちな人が多かったため、他国と日本の国歌に対する親しみの差のようなものを感じ、少し寂しくなりました。

しかし、国歌斉唱や祈祷などを通して自分達が各国の活動を背負っていくのだという気持ちや、今回のAYCで多くの学びを得て帰ろうという気持ちが高まり、身が引き締まる思いでした。



Cultural Night

文筆： 廣瀬

AYC 二日目、タガタイについて最初の夜に行ったカルチュアル・ナイトでは、フィリピン区、西日本区、東日本区それぞれのユースメンバーが、自分たちの文化を含んだプレゼンテーションを行い発表を行いました。フィリピンのメンバーはそれぞれ学校のテストがあり、日本のメンバーはなかなか時間が合わずに、すべてのグループが事前の準備は万全ではない状態ではあったけれども、それぞれ個性溢れる楽しい発表で他の地区のメンバーを楽しませていたように思います。

簡単に各地域の発表を紹介させていただくと、フィリピン区は音楽に合わせて、フィリピンを代表する遊び、乗り物、場所などの文化のイメージをスクリーンに表示して、それをメンバーが身振りでも表現していくというものでした。フィリピンの子供時代の遊びなどは日本の昔ながらの遊びととても似ていて、観光などをするだけでは気づくことのできない文化の共通点を見ることができたと感じます。

西日本区では、浴衣、セーラー服などの日本独自の文化を象徴する服を始めとして、メンバー全員でファッションショーを行いました。女性陣は浴衣やドレスなどをきれいに着こなし、男性陣は制服やメイド服を着て会場を沸かせていました。

また、自分が所属する東日本区では、男子は忍者スーツ、女子は浴衣をそれぞれ着て、昨年紅白歌合戦にもゴールデンボンバーの「女々しくて」に合わせてダンスを行いました。歌の間奏の間にちょっとした劇を織り交ぜたり、争いのシーンで折り紙の手裏剣を使うなど、参加者を楽しませることができたと感じます。盛り上がってくれたようで、二回目は椅子に座って見ていた他地域のユースメンバーやAYCスタッフとみんなで輪になって踊りました。

それぞれの発表が終わったあとは、フリータイムとなりましたが、スタッフの方がカラオケを用意してくださったので、

何人かが「YMCA」をはじめとして、有名な洋楽を歌ってくれたので、みんな楽しめていました。全体を通して、カルチュアル・ナイトでは笑顔が溢れており、この五日間で一番笑顔が多かったのではないかと思います。



Morning Devotion

文筆： 日下部

モーニングディボーションは、三日目の朝に西日本が行いました。三人の代表者が前に出て、聖書を読みました。

テーマは「国際社会の住民としての社会的責任」でした。私たちは国際社会の住民として、国家間の調和、人種間の調和、自然との調和がとれるよう、自分たちの住んでいる社会を変えていかなければいけません。そして、私たちは強い意志を持って社会に参加し、世界を変えていこう、という内容でした。

また、フィリピンの町中には、ストリートチルドレンや路上生活者が多くいました。また、世界にはご飯が食べられない人、病気やけがで苦しんでいる人が多くいます。そのような中で、今日、私たちがフィリピンに集まり、AYC 2013 が開催できることに、参加者の一人一人が心から感謝をする時間となりました。



Session1 “Take Pride When Serving”

文筆： 日下部

セッション1では”Spirit, Mind and Body Building towards Service” というテーマで基調講演がありました。他の人に奉仕することに喜びを感じる、目的を持って人生を生きていくことについてという内容でした。

まず、講演の初めに、講師の方から参加者全員に「なぜあなたは生まれたのか？」という質問が投げかけられました。これに対し、参加者の一人一人が、自分の生きる意味や将来の目標などについて考えました。このように、私たちは全てのことに「なぜ」と問い、理由を持って行動していくことが大切です。「なぜ」と問うことで、自分にとって本当に大切なもの（価値）、自分に与えられた責務（義務）、自分の決心に気が付くことができます。

また、私たちは一人で生きているのではなく、チーム、組織の中でたくさんの人に囲まれて生きています。その中で自分が果たさなければならない役割は何でしょうか。講師のお父様の人生を写した DVD の中では、親戚が年に一度集まり、お父様と一緒に誕生日パーティーを作っていく時間を大切にしていました。年老いていく父にできたことは、毎年心をこめて誕生日をお祝いし、喜んでもらうこと。その時間を大切にする中で、自分を育ててくれた父に感謝の気持ちを伝えることができた実感し、他人に奉仕することに喜びを感じたと話されました。社会の中で自分に必要な役割を考え、どのようにして他人に奉仕することで喜びを感じるのか、考えさせられました。



人生は短い。だからこそ、一つ一つの行動に意味を持ち、毎日を大切に生きていかなければいけません。講演後、グループごとに分かれて意見交換を行いました。参加者からは、「自分の目標に向かって、一日一日を大切に努力していきたい」「自分の将来の夢を実現させるために、毎日少しずつでも勉強していきたい」などの意見が出ました。一人ひとりに生きる意味があり、目的があるというのを知ることができる機会となりました。

Session2 “Environment: A gift from God”

文筆：平野

主にセッション2では “Foundation of Philippine Environment (FPE)” という環境保護の NGO からエグゼクティブディレクターの Godof さんのプレゼンテーションを聞きました。内容としては、まずフィリピンにおける環境問題についてみんなで共有をし、最後に私たちが何をできるかを考えました。

地理的に年に20回も台風が訪れるフィリピンは、人口9400万人、3000万ヘクタールの土地、また約7100の島から成り立つ美しい島国です。しかし一方で、フィリピンは世界19カ国の中の環境ホットスポットとされており、人間の手による環境破壊の脅威にさらされているのが実情です。

違法の森林伐採や炭を作るために、1900年には国土の70%が森であったのにも関わらず、1999年には18.3%、2010年には6.6%と、年々減少を続けています。また、これにより、フィリピンの森の均衡やサイクルを保っていた鷹も減少しました。

2011年2月24日に、National Greening Program が国の最優先事業として発足しました。2011年から2016年の6年間の間で、15億本の木で150万ヘクタールをカバーするという計画です。森の木を使わず、別の素材で代用し、ボランティアや、国が森林の復活に力を入れた結果、まだまだではあるけれども、今では少しずつ回復し、小さかった木もいまでは長木にまで成長しています。

セッション2を終えて、「環境保護を唱える、現状把握、情報・教育・コミュニケーションによる環境認識の共有化を促進、森の木に頼らない資源を調達する」これら4つが私たちユースにできることではないかと話し合いました。



Session3 “Youth on Fire”

文筆：石井

講師は、インターナショナルスクールの教員や KUMON PHILIPPINES でのプレスクールセクションの担当などをされていらっしゃるご経験がおありで、現在はロータリークラブで様々な役職についていらっしゃる MYREZA CATHERINE S.GONZALES さんでした。

他のセッションと違ったのは、半円で講師を囲うように座ったことです。この陣形は、全員がセッションに参加しやすいようにと考えられたことらしく、歌い、体を動かし、時にはだまし絵を見せるなどして全体の緊張感を解すことに努めておられました。

お話の内容は、自分の持っている才能を放っておくのではなく、「知識や技術を増やしていくこと、常に向上していくことの大切さ、習慣の重要性、アウトプットをしていく必要性」などでした。

特に印象的であったのは習慣づける力の大きさについてです。何らかの目標を達成する上で小さな努力を習慣に組み込むことで、効率的に目標に近づいていくことができると主張されました。それは、無意識のまま継続的に日課をこなすことで自然と習慣が体に染みつくからだ。歯を綺麗にするには歯磨きを習慣づけることと論理は一緒です。習慣づけるのコツとしては「習慣にしたいことを宣言してから 21 日間続け、一回でも怠ったら再度 1 から初めること」だと教えて頂きました。

また、自分が学んだり感じたりしたことを、自分だけのものにしておくのではなく、周囲の人達へアウトプットしていくことがとても重要であるというお話も聞くことができ、AYC での学びやその他の場所で学ばせていただいた多くのことをたくさんの人に伝えていくことも心がけようと決意しました。

今後の人生においてとても有意義なお話を聞かせていただくことができ、すごく学びの多いワークショップでした。



AYR 選挙・AYC レポート

文筆：藤永

IYR 代表のステファン・ウォーカーさんを筆頭に任期 2 年間に要する AYR(Asia Youth Representative)の選出が執り行われた。立候補者は東日本から 1 名、西日本から 1 名、それぞれ AYR としての意気込みを皆の前でスピーチした。投票システムは無記名で東日本、西日本、フィリピン参加者それぞれ一票しか与えられなかったため、質疑応答の時間が結果を左右する形となった。私は最後の質問として「リーダーとは如何なる者か」と投げかけたところ、両者とも「先頭を走るとともに、影ながらのサポートをする者だ」と返した。結果、2 対 1 で西日本の沖麻実さんが選ばれた。

彼女は AYR となることが夢であり、ビジョンは各地域の状況を把握した上ですべき課題に取り組むという現地調査をベースとするもの。現地の詳しい情報を得られることで地域ごとに最適と思われる手段を施せることから、皆からの評価は高かった。しかし、フィリピン参加者が忠告したことでもあったが、これは AYR 以外の各地域メンバーの積極性と即時性のある連絡網が必須条件となる。代表と一般メンバーとの意識における差は大きいですが、如何にして彼らを積極的にさせ己の力の一部として加えられるかがキーポイントとなってくるだろう。

AYC レポートは、参加者一同の意見を効率的に要約するため、班分けされていたグループの代表 5 名と AYR 沖さん、IYR ステファンさんによって作成、編集された。

内容は主にタール火山などの観光、Chosen Children's Village(障害者児童施設)訪問、カルチュアル・ナイト、3 つの基調講演であった。それらがどういったものであったかは各イベントの報告書を参照してもらいたいが、今回の AYC 全体を通して学び培った「自分の存在意義を見出すこと・環境問題が将来世代に影響しないように手を打つこと・習慣づけることが目標達成に大きく貢献すること」を発表し、沖さんの AYR としての意気込みが語られた。



Circle of Light

文筆：藤永

3つのセッションを終えてAYRレポートを完成させることでAYCでの目的を達成した我々はその夜、ご褒美としてレクリエーションをした。二人一組になって与えられた葉っぱを息だけで移動させ、その次には相方を目隠し状態で外の広場まで誘導するといったゲームであった。

ゲームを終えて広場に着くと、全員手にキャンドルを持って円状に並んだ。AYCでのことを全員で振り返り、出会えたことを感謝し、一人ひとりがこのフィリピンでの経験を活かした次なる目標を発表した。キャンドルを持たせたのは、自身の思いを炎として表現するためであった、その意志を強く燃え上がらせようとする意図があったのだと思う。



キャンドルの火を消し終わると、プールを開放してくれた。それを耳にした一同はすぐに水着に着替えて、プールにドボン。暑い天候の中で入るプールは最高であった。



AYC Clothing Ceremony

文筆： 日下部

四日目の午前、AYC だけの閉会式が行われ、clothing worship の部分を、東日本が担当をしました。テーマは、「行く、見る、動く」でした。私たちがフィリピンに集まっている間、いろいろな出来事や気持ちをシェアし、共に学んできました。そして、私たちが、個人やコミュニティの多様性を正しく理解する YMCA のファミリーの一員であることを喜ぼう、という内容でした。



その後、AYR による AYC レポートや、AYC2013 の委員長、IYR によるスピーチがありました。AYC の閉会式から今日まで、私たちが様々な場所で見たり学んだりしてきたこと

について振り返りました。そして、無事に AYC が閉会できることに、皆が感謝をしました。

たくさんの人々の支援や準備により、私たちはフィリピンに集まり、AYC に参加することができました。ここで学んだことを、YMCA の仲間に、自分の国の人たちに伝えていこう、という話がありました。また、AYC での新しい仲間との出会いに感謝し、これからも連絡を取り合い、繋がっていようと約束をしいました。



Taal Volcano

文筆：藤永

Closing Ceremony を終えて我々は世界一小さい火山として有名なタール火山を観光してきた。火山の麓までは港からボートで向かわなければならないほど、周辺はタール湖で囲まれていた。

麓には小さな村があり、山頂までは徒歩だけでなく乗馬を楽しみながら向かうことも可能だった。初めての乗馬を体験しながら、山頂までの長い道のを楽に進めることから、私は馬に乗って山頂を目指した。



面白いことに参加者の中で何か私と岡本の乗る馬だけがよく走る馬だった。しかしコツを掴めたことで馬を走りやすくさせられたため、岡本と私でどちらが先に着けるか競争を楽しんだ。結果は私の負けであったが。抜かれた時のあのドヤ顔は忘れない。

山頂に着くと、そこには陥没してできたカルデラが広がり、湖が存在していた。その景色は絶景で、偉大な地球の一部を感じた。いい思い出ができて皆満足そうであった。

ちなみに、徒歩を選んだ人を見る限り日焼けして相当疲労が溜まっているようであった。



President Ball Party

文筆：藤永

タール火山から戻って少し休憩している間に正装に着替え、ボールパーティーに出席した。会場は豪華で皆わくわくしている様子だった。席につくと世界各国から参られたワイズメンズの方々が会場を埋め尽くしていて、その正面にあるステージでちょうど韓国ワイズが出し物を披露していた。しばらく様子を見るのかと思いきや、すぐにステージに立ってユースの出番を迎えることに。

私たちは音楽に合わせて練習したダンスを披露した。正装で踊るのは初めてだったが皆楽しく踊ることができたようで、アンコールを頂けるほど会場を盛り上げられた。私たちの出番が終わってもしばらく各国による出し物が行われたが、一番印象的だったのは会場全員でYMCAの曲に合わせて踊ったこと。全員が知っている曲であったこともあり、お年寄りの方でも立ち上がって踊っておられた。

改めてYMCAの良さを皆で実感するようなパーティーだったものの、正装に汗がびっしり浸みていたことは唯一憂鬱に感じた。



Asia Area Convention (AAC) Closing Ceremony

文筆： 廣瀬

AYC が終わり、全員での活動が最終になる 8 月 4 日には、AYC と平行して行われていた、アジア大会 (AAC) の閉会式に Y's の方々とともに参加させていただきました。

この閉会式は、主に AAC の振り返りと総括、また今後の国際大会や新たな人事の発表を行っていました。また、式の序盤で、「このアジア大会を通して学び、それぞれの地域へ戻った後にすること」を一人ひとりが記し、木の枝に貼り付け、それぞれの思いをひとつの形に残しました。



また、今回の AYC で新たに 2013-2015 の Asia Youth Representative (AYR) に選ばれた、沖麻実さんがユースメンバーを代表して自分たちが 4 日間で行った、孤児院や観光地の見学、また講演者を呼んで行われた今回の AYC のテーマである「Y-Youth」「E-Environment」「S-Service」の話し合いなどの様子や、それらを通して学んだこと、感じたことを AAC の参加者たちにお伝えしました。

この閉会式でも、前日の夜に行われていたボールパーティー同様、アジアのワイズの方々と知り合う機会をたくさんいただきました。その中でも特に、今期のワイズメンズアジア地域の代表を務める岡野さんは発表の中で、ワイズや YMCA の活動を長く続けていくために若者への世代交代の必要性を唱えられていて、今回 AYC に参加した一人として、自分にできることを考えなくてはいけないなと思いました。



AYC を終えて、感想

東日本区 参加者一同





廣瀬 (HIROSE)

今回、フィリピンで行われた Asia Youth Convention (AYC) に宇都宮ワイズメンズならびに宇都宮東ワイズメンズの推薦をいただいて、初めて参加させていただきました。この直前まで、YMCA の Short Term Exchange Program (STEP) を利用させていただき、開催国のフィリピンにあるセブ島に滞在していて、AYC の時期とちょうど重なっていたので、セブ島から向かわせていただきました。

今回は、その直前に英語の語学留学をしていたこともあり、この AYC の間に自分の英語力がどれほど上達しているかも確かめるつもりでいました。結果は、ぼろぼろで自分の思いを正確に伝えるにはまだまだでした。

しかし、一方で英語が完璧でなくてもみんなとコミュニケーションはとれたし、みんなと冗談を言い合ったりすることもできました。英語が話せることは、外国で自分を表現するために必要なスキルですが、それだけが必要なスキルだけではないし、たとえそれがなくても一緒に活動したり、笑いあったりすることができるかと実感できました。

また、今回の開催国であったフィリピンは、自分にとって割りとは身近な国でフィリピン人の友達も多くいたので、フィリピンに関してそんなに新たな発見はないだろうと思っていましたが、参加したフィリピン人はみんな中国系のフィリピン人で、自分の知っている人々とは、また違う文化や背景をもっていて、文化の多様性を実感したものでもありました。

この AYC に参加するにあたり、多くの方と知り合い、多くの方に助けていただきました。YMCA、Y's メンズクラブ、Y's ユースの活動について、自分はまだまだ知らないことがたくさんありますが、今回得ることができた繋がりを絶やさずに、これらの経験と繋がりを

将来につなげることが大切で、そのために自分になにができるのかを考えるきっかけにしてくれた AYC になったと思います。





目下部 (KUSAKABE)

AYC 2013 に参加させていただき、新しい仲間に出逢い、忘れることのできない経験をすることができました。普段、YMCA の中で liby でのボランティアリーダーやキャンプリーターとして活動している私にとって、別の活動をしている YMCA の仲間、年齢や国籍も全く違う仲間と交流することは、とても刺激的なものでした。

フィリピンに到着して最初の日、自分が新しい場所に立っていることに驚き緊張したことや、英語でコミュニケーションを取ろうと努力したこと、別れが惜しくて、参加者全員がずっと手を振っていた時のこと、すべてのプログラムが終わって日本に帰ってきた時の安心感や達成感など、AYC の参加中にたくさんのことを感じました。今でも、そのたくさんの気持ちや思いが心に残っています。それらのひとつひとつが、日本に帰ってからの私の原動力になっており、また新しい場所で自分が持っていない価値観や考えを持った人と出会いたいという気持ちへと繋がっています。

AYC の期間中、特に印象に残っているのが、食事の時や移動中など、ふとした時に行われる仲間との会話です。互いの国の言語に興味を持ち、教え合う場面が多くありました。英語を使ってその言葉の意味を伝えあったり、その言葉を使ってふざけ合い笑ったりしました。そこでの交流があったからこそ、AYC の参加者の距離が近くなったのだと思います。

私は AYC に参加し、自分から一步を踏み出し、新しい場所や皆の中へ入っていくことのおもしろさを実感しました。これからは、様々な事にチャレンジしていく気持ちを大切にしていきます。そこでは、必ず新しい人との出会いがあって、学ぶことがあるはずだと、今回の体験を通して思っています。

このように、たくさんの貴重な体験をすることのできた Asia Youth Convocation 2013 という場を用意して下さった方々に心から感謝をしています。ありがとうございました。





平野 (HIRANO)

私が AYC2013 に参加しようと思った理由は主に2つあります。1つは、前回の世界大会であるノルウェーでの経験が非常に有意義で、新しい仲間、国境の垣根を越えた関係を築き上げる事ができた喜びが忘れられなかったこと。2つは、私は世界的にも現在注目を浴びているアジアに強い関心が有り、アジアにフォーカスを当てた研究をゼミでしています。また、今回はアジアで行われる大会であるという事から、きっと、アジア全域から来る学生と前回のような素晴らしい繋がりが出来るのではないかという期待から参加させていただきました。

終えてみての感想は、政治的な理由で、台湾からのユースが全員キャンセルという事もあり、日本、フィリピン、バルバドス (IYR) の三カ国のみの参加ではありましたが、一言で、とても楽しかったです。一番の収穫はやはり、フィリピンのユース達との思い出だと思います。確かに、少々辛い事もありましたが、思い返せば、今では私たちが笑顔で笑っていた場面しか覚えていません。また、彼らの高いポテンシャルと素晴らしいホスピタリティに非常に感動し、影響を受けました。これはきっと私だけではなく、すべての日本人参加者が感じた事なのではないでしょうか。ですので、私たちも日本人として、彼らに負

けないように、もっと深い知識や教養を身につけ、日本にとどまる事のない色々な意味で幅広い人間に成長しなければなりません。

今回の経験や思いを、ずっと心に留め、今後もアジアに生きる日本人という事を意識しながら、次の IYC に向けて、日々の学生生活をこれからも過ごしていきたいです。





岡本 (OKAMOTO)

今回は日本勢の東と西、フィリピン勢、バルバドス出身の IYR 代表という 3 カ国のみということで当初、思っていたほどグローバルではないのかと思っていた。だが 3 カ国しかないという点をメリットに変え、互いに深く交流できたことにとっても満足している。

みんなで交流することもそうだが AYC の企画に対して改善点を見つけ出すこともあった。例えば **Chosen Children Village** では寄付のお礼にと子供たちはパフォーマンスをしてくれたが、正直自分のなかではなにもしていない焦燥感に覆われた。さらに施設の人は、「子供たちはあまり外の人に会わないから今日はとてもはしゃいでいる」とおっしゃった。その時に自分の気持ちの中にあっただのが、「この子供たちと一緒に歌い踊ったりすることでもっとこの子供たちのためになることが出来、この子供たちにとっても自分たちにとっても貴重な体験になるのではないか」ということである。その証拠に 2 人の男の子が歌っているときに自分は手拍子をしたが、パフォーマンスが終わり、写真を撮るときに笑顔でしゃべりかけてきてくれたのである。また、パフォーマンス中にもちらちらこっちを気にかけていた。そこでこういうこと細かいことも必要なのではないかと気付いた。

最初にも述べた通り、国は少なかったがとても貴重で有意義な時間を過ごせた。さらに言えば自分は偶然にも誕生日があり、みんなに祝福してもらった。人生の中の大事な日をこの仲間たちと過ごせたことを本当に幸せに思う。このような体験をする機会を与えてくださったすべての人に感謝したい。





石井 (ISHII)

今回の AYC に参加させていただいて、私が感じたこと、学んだこと、考えたことはたくさんありますが、その中でも特に強く印象に残ったことは2つあります。

まず一つ目が、人生の違いです。

私は自分の日常が当たり前だと錯覚していました。自由に習い事ができ、衣食住が確保され、十分に教育を受けられ、パソコンもスマートフォンを持つことができていました。

ここ数年、オープンフォーラムYや IYC、AYC など世界中にある貧困問題、スラム、衛生問題などについて学べたことで、自分が今までとても恵まれた環境で生きて来たのだと認識できました。とはいえそれは知ったというだけで、心の底からの実感はしていませんでした。

しかし、今回フィリピンでの大会期間中、本当に様々な生活をしている子供たちと出会いました。

Chosen Children Village で生活する障がいのある孤児達、馬に乗って火山を上り下りする少年、物を売りに来ていた少年、私達を見つめて物乞いをしていた子供たち、そして AC のクロージングセレモニーの会場で両親と豪華な朝食を食べたり、モールアジアで両親に好きな物を買ってもらったりしている子供たち。

同じ人間、同じ子供。でも、彼らの境遇や取り巻く環境はそれぞれ全く違い、きっと将来の生活も大きく違うのだらうと思います。

Chosen Children Village で、スタッフの方がおっしゃっていた言葉がとても深く心に残りました。「この子供たちは、障がいがあり、両親の愛も得られずに生きている。あなた達は、五体満足に生まれ、あなた達の両親はあなたに大きな愛を与え続けながら育てたと思う。それはとてもすごいことで、感謝をしなくてはならない。」ということです。

様々な境遇の子供たちと出会ったこと、このスタッフさんの言葉、様々なことが如何に自分が恵まれて生きてきたのかを痛感させました。いままでのようにただ頭でわかって知ったのではなく、実感し、いままでの自分の人生を振り返り、そしてこれから自分はなにをすべきなのかを真剣に考える良き機会となりました。

2つ目は、行動し、継続することの重要性です。

Youth On Fire のワークショップで習慣についてのお話がありました。それは、習慣をつくるためには、まず行うことを決めて、宣言して、そして21日間続けることで習慣が作られるというものでした。

このことは、個人の習慣ということだけでなく、ワイズユースの活動にも共通する部分があると思います。

どんなに小さな活動だとしても、まずやると決めて、宣言して、続ける。活動を始める前

には、マイナスなことばかり考えがちではないかと思います。

どうせ別の人がもうやっているから、こんなことやったってできる範囲はたかがしれてる、うまくいかないかもしれないなど、挙げればきりがありません。

しかし、何事もしっかり考えて続けて行けば、どんなにちいさくても何か起こせるはず、しようと思ってたけどやらなかったとって結局なにもせずに終わるより、どんなに小さくても行動することが大切だと、今回の AYC を通して感じました。

自分だけが恵まれていても、嬉しくありません。恵まれている環境に感謝し、他者に対してどう貢献できるのか、自分のやるべきことはなにかをしっかりと考え、そこから行動に移し、それを継続させていくことが自分の使命だと思います。

AYC という素晴らしい機会を与えていただいたことに心から感謝いたします。本当にありがとうございました。





藤永 (FUJINAGA)

フィリピンにて AYC に初めて参加した。私個人の目的はフィリピンの現状を実際に確認することと、海外のユースはどのようなことにどんな志をもって取り組んでいるのかを知りたかったことの 2 つ。

残念なことに今大会に参加したのはフィリピン、日本、IYR(国際ユース代表)の出身地であるバルバドスの 3 ヶ国だけであった。どうやら台湾と香港を合わせて 40 名程の参加者が予定されていたようだが、フィリピンとの領海問題で見送られてしまったようだ。

しかし参加国が少ないにも関わらず、私は目的を達成できたことに満足している。フィリピンでは森林伐採による将来世代への影響が著しいこと、スモークーマウンテンというゴミの山による火事やそこで必死にお金になりそうな物を探す子供たちのこと、そして障害者児童施設で子供たちに自立させる取り組みがなされていることを学んだ。森林伐採による環境問題に関しては具体的な対策を見出すことはできず、スモークーマウンテンのことは国の経済状況が改善されない限り解決しないだろう。だが、この障害者児童施設での取り組み、その姿勢は日本に持って帰るに値するものであった。

また、もう 1 つの目的も成し遂げられた。「このような時代で、将来何をしたいか？」とフィリピンのユースに質問を投げかけた。返答は漠然としたものではあったが、かのスモークーマウンテンで苦勞している子供を助けたいと言うユースがいれば、何か自分にできることがあれば全力で取り組みたいと答える人が全員であった。国境を越えても志が高い同期世代がいると、自分も元気づけられる。

観光でも滅多にない珍体験もできたし、フィリピンでは良い思い出を作ることができた。自分の予定が合うのであれば、是非来年インドで開催される IYC に参加したい。

